

中学生の時期の特性

港区立青山中学校校長 福井 正仁

1 中学生は、どういう年頃か

思春期真っ只中の中学生は、自己形成の過程であり、既存のものを批判的に見る傾向もあります。そのため、社会では、中学生の年代の行動について、ややもすると否定的な見方をされがちです。しかし、毎日 173 名の生徒と生活していると、一人一人が個性を發揮し、試行錯誤しながらも、懸命に自己形成のステップを上っている姿に感銘を受ける場面が沢山あります。今の子どもたちは社会性に課題があるとの指摘もありますが、逆に昔と比べて、自分らしさを忌憚なく發揮し、「横並び」ではない生き方を求めたり、自分の意見を持ち、他の意見とうまく調整したりといったことに秀でている面もあります。

生徒に多様な社会体験を積ませ、社会事象を批判的に見るばかりではなく、自らの課題ととらえ、解決策を考えながら自ら行動していけるような力を付けたいと考えます。

2 年生は、地元の 25 の事業所に受け入れていただいた職場体験に続き、9 月 21 日（土）に東京青年会議所港区委員会の 20 名の皆様にご来校いただき、「模擬就職活動」を体験しました。生徒が社会との接点を身近に感じる貴重な半日でした。同日、1 年生は、東京都薬物乱用防止推進港区協議会の皆様の協力による学習をし、社会の多様な側面を感じ取ったようです。

（「青中だより」平成 25 年 10 月号より抜粋）

2 中学生の活動を評価する「ものさし」

10 月 26 日（土）の学芸発表会には、約 300 名の地域、保護者の皆様にご来校いただき、各学年の行事、教科、部活動等の舞台発表と展示発表をご覧いただき、そして各学級の合唱をお聞きいただき、お励ましいいただきました。発表の一例を挙げると、学級、学年の弁論大会を通して選抜された代表生徒による優秀弁論発表は、1 年生は「自然」、2 年生「人」、3 年生「社会」のテーマでした。現在の子どもたちの行動等についての課題が指摘されることが多い昨今ですが、私は、弁論を聞き、生徒がしっかりと自分を見つめ、また社会を見つめ、そこから学ぼうとする強い姿勢をもっていることを改めて実感し、頼もしく思いました。手前味噌ながら、朝の演目から午後の合唱コンクールまで、目頭が熱くなる場面の連続でした。生徒の一生懸命な姿は会場の皆様の涙も誘いました。

私は、この 3 月まで、小中一貫教育校に勤務していましたので、久しぶりに見る中学校単独の学芸発表会でした。中学生のパワーを感じるとともに、「中学生らしさ」とは何かも考えさせられました。一貫校では、1～9 年生の児童・生徒による学芸発表会で、子どもたちの発達の過程が如実に分かります。発達の段階により、指導の在り方も異なります。小学校低学年は、教員がモデルを示し、子どもに実際にやらせてみることから始まります。一方、中学校では、生徒の主体的な活動を重視し、自分たちで作品を作り上げる環境を整えるのが教員の重要な役割です。中学校の学芸発表会は、日常の学習成果の発表の場であると同時に、生徒の自治活動、自主的な活動の場でもあります。

中学生の諸活動を評価する「ものさし」は、活動の目的を理解し、人や社会とのかかわりを意識しながら、いかに主体的に、完成度の高いものを目指して、懸命に努力してきたかが大切な要素です。与えられたものをこなすだけではなく、主体的に、創り上げる活動を評価します。途中、試行錯誤を重ねながらも、完成を目指す主体的な姿勢こそが貴重です。そのためにも、私たちは、自分の考えを他人に委ねず、自らの考えがもてる生徒の育成を進めていく必要があります。一見、「幼く」見える最近の中学生も、実は私たちの想像以上に「大人」であることに驚かされることがあります。中学生をもっともっと「大人」にしていくことが、中学校の使命であると考えます。

（「青中だより」平成 25 年 11 月号より抜粋）

3 中学生は「子ども」か？

私たちは、日頃、生徒に対して、「もう子どもではないのだから、・・・」という表現を使うことがあります。中学生は、年齢では 12～15 歳です。法律を見ると、少年法では、20 歳未満を「少年」とし、児童福祉法では、18 歳未満を「児童」としています。また、国際連合の児童の権利に関する条約では、18

歳未満を「児童」としています。一方で、交通機関は、中学生から「大人」の運賃になり、生徒は「大人」になったことを自覚します。

中学校の3年間は、子どもから大人へと飛躍的に成長する時期です。学校で日々生徒と接している私たちは、1年生から3年生までの生徒の伸びの幅の大きさに驚嘆を覚えることがあります。3年生になると、私たちと、大人としての対一の会話もできるようになります。それだけに、中学校に与えられた使命は、子どもをいかにバランスの取れた「大人」にしていくかに尽きると考えます。幸い本校には、3年生がモデルを示し、2年生、1年生は、3年生に追いつくよう懸命な努力を続けるという、よき伝統があります。中学生は「子ども」か、と問われたとき、もはや「子ども」ではなく、一步一步着実に「大人」に近づき、未来を志向する積極的な存在であると答えたいと思います。

（「青中だより」平成25年12月号より抜粋）

4 中学生をバランスの取れた「大人」にするために

上に記したように、中学生の時期の特性を的確にとらえ、バランスの取れた「大人」にしていくことが、私たちに与えられた責任です。

学校では、家庭、地域との密接な連携を図りながら、豊かな心、学力、体力の育成に努め、総合的な「生きる力」を身に付けさせる教育活動を行います。その際、できる限り生徒に「本物の体験」をさせるよう環境整備に努めています。

平成25年12月を例に挙げると、4日（水）と7日（土）に、1年生対象の音楽科の授業をサントリーホールの専門家を招いて実施しました。変奏曲について学習した後、プロの演奏家の演奏を聞きました。同じ7日（土）は、2年生対象の美術科の学習をサントリー美術館に出かけて行いました。この学習の特徴は、美術専攻の大学生15名が来校し、2年生60人を4人ずつの小グループに分け、それぞれのグループに大学生が入り、事前学習を行ったことです。学校、大学、美術館が連携した取り組みです。本校は、各学年が、サントリー美術館、国立新美術館、森美術館、21_21 DESIGN SIGHT 等に出かけて行う学習を10年近く続けています。生徒は、在学中に三つの美術館で学習し、人とのつながりが広がります。

また、13日（金）は、2年生全員が都立青山高校に出かけ、国語、社会、英語から一つを選んで高校の授業を体験しました。高校体験授業は、1学期に3年生が都立日比谷高校で受けており、2・3年生対象に毎年続けています。さらに、16日（月）は、3年生全員が青南幼稚園に出かけ、保育実習をしました。中学生が大変優しく幼児に接し、大好評でした。17日（火）、東京大学大学院新領域創成科学研究科の先生を招き、キャリア教育の一環として、2年生が「夢を叶える能力を身に付ける方法」と題した授業を受けました。21日（土）は、Kissポート財団の主催により、管弦室内オーケストラの東京シンフォニアを招き、全校対象の演奏会を開きます。

生徒会活動の「本物の体験」として、9日（月）に区立小・中学校の代表児童・生徒が集まって港区子どもサミットが開催され、本校からも生徒会役員2名が出席し、「いじめゼロをめざそう」をテーマに活発な意見交換をしました。そして、13日（金）は生徒会役員8名による「中学生座談会」を「未来をみつめて」のテーマで開催し、地域の皆様と活発な意見交換をしました。15日（日）は、赤坂地区総合支所主催の「区長と区政を語る会」に代表4名が出席し、「これからの赤坂青山を考える」をテーマに意見を出し合いました。

14ある部活動でも、毎日の「朝練」や放課後の練習、土・日曜日の試合などに積極的に取り組んでいます。15日（日）は、ボランティア・アート部が、毎年招かれている二葉乳児院でハンドベルを演奏しました。

本校は、3年生がモデルを示し、1・2年生がそれに追いつくように努力するという、よき伝統が続いており、そのことが生徒を「大人」にすることに大いに貢献しているように思います。社会においても、大人がよきモデルとなるよう、直面する諸課題の解決に努力を続けたいと考えます。その際、大人はあくまでモデルや指針を示し、生徒が主体的に、自らの課題として受け止め、解決策を探っていくような環境設定に努めることが大切です。目先の利益にウエイトをかけ過ぎ、「安全なレール」を敷き、そのレールをまっすぐになぞらせるだけでは、自立した生き方ができません。自分の考えを他人に委ねるような生き方となってしまいます。私たちは、心配が先に立ち、ついつい過剰に支援してしまいます。現在、生徒の自主性を高める教育が全国で進められていますが、生徒の立場に立つと、自分で考え、決めて行動できる場面が少ないように思います。しつけや訓練も大切ですが、中学生には自主的に判断し行動できる環境をつくっていくことも必要です。生徒の個性を尊重し、試行錯誤もしっかり見守りながら、「大人」へのステップを一段一段上らせたいと考えます。引き続きのご支援をお願い申し上げます。